



馬瀬芳知

Yoshinori Mase
 1932年 神戸に生まれる
 1956年 (株)平田建築構造研究入社
 1969年 (株)馬瀬構造設計事務所代表取締役
 現在に至る

小学校時代の思い出

My elementary school days

はじめに

私は昭和14年4月に小学校に入学し、昭和20年3月に卒業している。昭和12年7月に支那事変（日中戦争）が、昭和16年12月8日には大東亜戦争（太平洋戦争）がそれぞれ勃発し、昭和20年8月15日に敗戦を迎えている。こんな激動の時代に私は小学校時代を過ごしたことになる。卒業後63年の歳月が経ち、歳も76歳になった今、定かでない記憶を辿り、学年を追いながら当時の事件や出来事、風物詩など思い出して綴ってみたい。

私の出身地は兵庫県で、源平の古戦場である一の谷付近で生れている。少年時代は神戸市生田区山本通に住まいしていた。我が母校の神戸市立諏訪山尋常小学校を少し紹介すると、明治33年4月開校、県下では名門校であった。ために当時でも越境入学があったぐらいで、在校生は約1500人であった。所在地は現在の兵庫県庁の北約200mにあり敷地は東西80m×南北70m、校舎は三棟あり北側から見てコ字型に配置され、南北の校舎は鉄筋コンクリート造3階建てで普通教室になっていた。管理棟は西に面し鉄筋コンクリート造2階建てで1階が校長室、職員室、応接室、衛生室、事務室、小使い室等で2階は講堂であった。正門を入ると植栽に囲まれた奉安殿があり、奉安殿には天皇、皇后の御真影が奉られていた。校舎に囲まれた校庭には朝礼台、国旗掲揚塔、二宮尊徳像、滑り台、肋木、雲梯、低鉄棒、砂場付き高鉄棒、攀登棒そして土俵があった。土俵は出来たばかりであったが、入母屋造りの屋根に四本柱といった本格的なものであった。

一年生（昭和14年～15年）のころ

私は男ばかりの五人兄弟の末っ子で、三兄が6年生、四兄が4年生に在学中であった。

私は入学が楽しみで、入学式が近づくと母親に何度となく「もうなんぼ寝たら学校」とたずねていた記憶がある。新しい制服、制帽、ランドセル、学用品これらを前に指折り数えて、入学式を心待ちにしていたようだった。私は幼稚園に行けなかったため、なおのことその思いが強かったかもしれない。しかしその頃は幼稚園に上がる子は裕福な家庭の子であり、我が家のような借家住まいの貧乏人は無理であったと思う、幸いな事に近所ではほとんど幼稚園に上がる子はいなかった。そんな環境でもあった。

ところがである、楽しみにしていた入学式の前夜、強烈な胸の痛みで病院に担ぎ込まれる羽目となった。診断の結果、急性肺炎と肋膜炎を併発しており即入院となった。悪い事は続くもので、退院間近で今度は中耳炎を発病するしまつ。したがって私は入学式には参列していない。余談ながら、卒業する昭和20年3月頃は戦争末期で、ボーイングB29の空襲が頻繁にあり、卒業式が行なわれたか、否か、また参列した記憶もない。

入学時の校長は大浦茂樹先生で、ちよび髭を生やしておられたが、なかなか威厳があり高貴な雰囲気すら感じさせられた。強く印象に残っているのが、式典の時に履いてこられる革靴である。式典は常に講堂で厳粛に行なわれ、私語など発する者などいなくシーンと静まりかえっていた。そんな中学校先生は演壇に向かって一歩一歩ゆっくり歩を進められたが、その度に革靴がギュー、ギューと鳴り、よく響いた。現代だと鳴る靴は安物とされているが、その時は大変上等の靴に見えたのである。

一年生のクラス割りには黄組で、受け持ち（担任）の先生は小林花栄先生だった。今もご健在だが、当時ふっくらした容姿でなかなかの美人であった。袴姿で教鞭を執っておられたのが印象に残っている。「サイタ サイタ サクラガ サイタ」と片仮名で習ったのが「小学国語読本 巻一」の初めであった。なんとも懐かしい思い出である。通信簿の評価は甲、乙、丙で評価されていたが、2年後になぜか優、良、可となった。学期末に私の通信簿を見た親兄弟が「なんや アヒル（乙）艦隊やないか」と揶揄されたりした。

一年生の時の出来事としては、何とんでも小学校の土俵開きに、大相撲の一行がやってきたことである。横綱双葉山が、露払いに閑脇名寄岩、太刀持ちに大関羽黒山を従え立行司木村庄之助が仕切り、土俵入りを行なったのである。双葉山といえば不世出の大横綱と称され彼の69連勝の記録は今だ破られていない。彼らは立浪部屋に属し、立浪三羽ガラスといわれ、人気絶頂の力士たちであった。後に羽黒山は横綱に、名寄岩は大関に昇進するのであるが、テレビのない時代、生の力士を見るのは初めてであり、大興奮したものだ。力士のプロマイドが流行った頃でもあった。

この頃は支那事変の真っ只中、お国のため、天皇陛下のため、という大義名分のもと召集令状（赤紙）一枚で毎日のように、近所の若者が出征していった。親類縁者、隣近所の老若男女が、のぼりを先頭に行列を組んで送り出して行くのである。国旗に「武運長久」などと寄せ書きされた物を襷に掛けた出征兵士を、最寄の駅まで「出征兵士を送る歌」とか、「愛国行進曲」などを歌いながら送っていくのである。この頃はまだそれほど深刻さはなく、むしろお祭り騒ぎの雰囲気であった。我が家では長兄が昭和15年に19歳で志願兵として海軍へ、三兄が16年に13歳の若さで少年航空兵として、二兄が20年に19歳で陸軍に、四兄も20年に15歳で予科練と、それぞれ出征していった。ただ戦後全

に残っている。

ただ戦後全

員が奇跡的に復員してきたのである。

また支那事変の戦果を「陥落」とか「x x進撃中」などと新聞、ラジオで報道し国民の士気を鼓舞していた。時には腰に鈴を付けた者が「シャン シャン」と鈴を鳴らしながら「号外 号外」と連呼しながら号外を配り回ったりした。戦果を知って人々は、昼は小旗を持って「旗行列」を、夜は各自提灯に火を入れて「提灯行列」に参加し「陥落 バンザイ バンザイ」「x x進撃中 バンザイ バンザイ」と戦果を祝い市中を練り歩いた。私も親に連れられて訳が分からないままに行列に参加していた。各家庭には国旗と旗竿が常備されており、祭日や国家的慶事には門口に掲揚していた。旗竿は黒と黄色の縞模様で先端に金玉が付けられていた。国旗の掲揚は家庭のみならず、役所、学校、企業と全てが半強制的に行なわれていたようだ。

銃後の主婦たちは慰問袋や千人針を作っては戦場に送っていた。千人針とは長方形の白布(晒し)に赤糸で一針づつ縫って千個の縫い玉を作ったものである。作る人によってはその布に五銭玉(穴あきコイン)を縫い付けたりした。これは死線(四銭)を越えると縁起を担いだものである。千人針は弾よけとして兵隊達に喜ばれ、女性が千人寄って願いを込めて作るとされ、近所の主婦をはじめ街頭で道行く女性達に協力を求めたりして作り上げていた。

正月は未だ神戸らしさが少し残っていた。新年が明けると午前零時を期して、神戸港に停泊している全ての船舶が一斉に汽笛を鳴らし新年を祝った。大きな船小さな船それぞれに音色がちがいで、何ともいえない風情があった。神戸の町は山と海が近く東西に細長い地形であり、山手に住む我が家にも十分汽笛の音が聞こえたのである。また神戸には在日華僑が多く住んでいたせいもあって、正月三箇日は爆竹が盛んであった。

我が家では、朝お節料理と雑煮をいただき、父親からお年玉を貰うのが習わしだった。元旦は学校で新年を祝う式典があり登校しなければならなかった。お年玉は式典が終わってからぼろ袋を開けるように言い聞かされていた。お年玉の中身は50銭銀貨1枚と決まって

いたが、早く開けたくて式典など上の空であった。

学校での公式行事の式典は、四方節(元旦) 紀元節(神武天皇の即位日、現建国の日) 天長節(昭和天皇の誕生日、現昭和の日) 地久節(昭和天皇の皇后の誕生日) 明治節(明治天皇の誕生日、現文化の日) 新嘗祭(秋の収穫を感謝する式典、現勤労感謝の日) 神嘗祭(伊勢神宮に新穀を奉納する日) 入学式、卒業式、始業式、終業式などだった。その日は全て制服で登校しなければならなかった。式典に欠かせなかったのが、両陛下のご真影に対する礼拝と、校長先生による「教育勅語」の奉読であった。

二年生(昭和15年{紀元2600年}~16年)のころ

担任は笠松美成先生(男)で、ちょび髭を生やしたうるさい先生という印象が強い。この先生についてはあまり良い思い出はない。

教科は修身、国語読本、唱歌、理科、算術、珠算、習字、図工、体操などで、高学年になると国史、地理などが加わった。

学校では雨降り以外は運動場で毎日朝礼が行なわれた。全校生が学年・クラス別に縦列に並び、当番の先生がその都度号令をかけていた。因みに号令は全て軍隊式だった。まず東方を向き「東方遙拝 最敬礼」の号令の下皇居に対し遙拝し、続いて伊勢神宮に対し二礼二拍一礼の遙拝を行なった。そのあと校長先生のお話や当番の先生の連絡事項などがあり、体操などを行なって終わった。

算術の時間に九九を習ったのが二年生の時だった。教室の後ろの壁面に成績表が張り出しており、2の段、3の段と先生の前ですらすら言えた者に合格の が付けられていった。少し詰まったりすると、「はい そこまで もう少し練習して」と言われ合格がもらえなかった。絵とか習字など出来の良いものは5重丸が付けられ、張り出されたのも同じ場所だった。「張り出し」は大変名誉なことで、「お母ちゃん、私の絵 張り出してもろてん」と母親に報告したものだ。

昭和15年は神武天皇が初代天皇とし

て即位してちょうど2600年になり、まさに紀元2600年であった。余談ながら、西暦など教えられていなかった。この年は年間を通じて学校はじめ各地でいるんな記念行事が盛大に行なわれた。また奉祝歌「紀元2600年」を大宣伝し、我々もよく歌わされた。「金鶏輝く日本の 栄えある光身にうけて いまこそ祝へこの朝 紀元は二千六百年 ああ一億の胸はなる」と、神武天皇が弓を持ち、その先端に金鶏が羽を広げて止まり、金鶏から後光がさし、敵の目をくらまし、神武天皇が「討ちてしやまん」と発せられている絵柄を思い出す。高学年になると初代神武天皇から123代大正天皇まで歴代天皇の名前を暗記させられていた。「神武 綏靖 安寧 懿徳 孝昭 孝安 孝靈 孝元 開花 垂仁 景行……孝明 明治 大正」といった具合である。

更に昭和15年は、オリンピック東京大会、日本万国博覧会などの開催が予定されていたが、支那事変の為に残念ながら辞退せざるをえなかったらしい。また日・独・伊の三国軍事同盟(15.9.27)が結ばれたのもこの年であった。

神戸の話を少し、JR神戸駅近くに湊川神社がある。この神社は南北朝時代に、後醍醐天皇に忠義をつくした楠木正成とその一族が合祀されている。正成は九州から京を目指す足利尊氏を阻止するため、延元元年(1336年)湊川のこの地で戦い、多勢に無勢、敗戦し自刃した。元禄5年(1692年)水戸光圀(黄門)が墓所を建立、その後明治天皇が正成の忠義を後世に伝えるため、神社創建を命じた。当時初代兵庫県知事であった伊藤博文が、その命を受け建設の指揮をとったとされ、明治5年5月24日に「別格官幣社湊川神社」が創建された。戦時中は大楠公と称し、彼が残した「七生報国」の言葉と偉業が、「忠臣の鑑」の戦の神様と讃えられ、軍人たる者一度はお参りしなければならぬ、とされ全国から軍人の参拝が絶えなかった。また神社が所在する事により、兵庫県及び神戸市の誇りの一つでもあった。地元では楠公さんと呼び親しんだ。皇国日本を修身教育する上で打って付けの人物であったといえる。